

三木露風未発表の長詩篇「天父と閑古鳥」について

家 森 長 治 郎

一

このたび財団法人霞城館（兵庫県龍野市龍野町上霞城三〇番地の三）に収蔵されることになった露風資料の中に、八メートルに余る和紙の巻紙に墨書された、七五調四行六十三節の長詩篇「天父と閑古鳥——我愛する三木露風の妻のモニカに贈る——」と、同じく巻

紙に墨書された、七五調四行四節の「妻に」がある。両詩とも、なか夫人が筐底深く秘しておられた作品で、『三木露風全集（全三巻）』編集当時、安部宙之介氏を中心とした編集者五名すべてが、この両詩篇の存在を知らなかったのである。両詩篇を発見されたのは、平成三年七月、露風旧居（三鷹市牟礼四丁目一七番一八号）解体によって出現した資料の調査に当たっていた霞城館長苗村樹氏である。

三木露風は大正九年五月にトラピスト修道院講師となり、なか夫人を伴って赴任した。大正十一年四月十六日に修道院長岡田普理衛師から夫妻とも受洗し、露風の霊名はパウロ、夫人はモニカである。

修道院長は明治三十年に來日したフランス人ゼラル・プリーエ師で、その後、日本に帰化して岡田普理衛と改名した。露風夫妻受洗のことを、「声」（第五八号、大正11・5・15発行、東京・教友社）は次のように報じている。

三木露風夫妻の受洗を祝ひて——トラピスト修道院より——
長い長い北海道の冬からさめて、御復活を迎へた我等の心はどんなに楽しいでしやう。オランダ牛の背の様であつた野や山が日に日に變つて、津軽の海は深いエメラルド色に成つて、春の神秘を語つてゐます。

北海道の冬よりも尚ほ長い十余年の冬の曙にありし氏は、受洗せられました。それは曙の太陽が真紅と成つて、成籠の雲間に赫く様に。御主が山上の垂訓に於て「福なるかな義に飢渴く人」と、説かれしは実に氏に於て、其意義を成すのでありま

す。

御復活の大祝日、それは「義に飢渴く人」に、どれほどの幸を与へる日であつたでしやうか。

此の日修道院長は、例を破つて修道院附屬の聖堂に於て、洗礼式並にミサ聖祭を執行し、日本人歌隊修士はミサを歌ひ、午後の降福祭に於ては、テデオムを歌つて、此の詩人を我が曙の日本公教会に与へ給ひしことを感謝致しました。

聖祭に於て氏等は初聖体を領けられました。それは「飢渴く人」の糧でありました。

御復活の大祝日、それは氏の為に、どれほどの相應しい日でありましたか。氏は去年の秋、詩「黒き悔」に於て

まだ黎明のほのぐらきに

鐘の音をきく、

我心は重し、

罪を負ひて痛苦あり。

目ざめたる時より

われ、日の中也昏しと思ふ。

われ、つみびとゆゑに

闇穴道を行けり。

主よ、我れは、

審判の日をまたがずして審かれし者に似たり。

堕ちて光を見ず

黒き悔の蠅に咀まる。

主よ煉獄の中よりして、

かゞやく空を仰ぎ得んごとく

長き悔の日よりして

新しき日をもちきたらしめたまへ。

と祈られました。憐の御主はどうして此の謙遜に眼をおほつてゐられませうか。

願はくは氏等、ポーロ聖人の如く日の本の為につくされんことを、モニカ聖女の如く母の鏡たらんことを。

大正十二年九月一日に關東大震災が勃発し、露風は親戚知友を見舞うため、十月に上京し十一月に修道院に帰ったが、間もなく強度のノイローゼになり、一時は症状が重く、東京にいた碧川かた（実母）が渡道して看護に当るほどであった。翌十三年春には回復したのであるが、事情があつて、六月三十日に修道院を辞して上京した。

この年の春から十五年七月まで、雅号の表記を羅風と改めた。

二

露風は大正十五年五月から六月にかけて、岩手県盛岡市・青森県三本木町（現、十和田市）、それから秋田県へと、東北地方に巡講の旅を続けているが、このことについて、「東北巡講記（一）」（小羊）六巻七号、昭和3・7・1発行、高松・小羊社）の冒頭で次のように述べている。

時は一昨年（注、大正十五年）の五月から六月へかけての好季であつた。預ねて其の当時の新潟教区長ヨゼフライネルス哲学博士から、秋田市へ行くことの御依頼を受けて居つたところへ、青森県三本木天主公教会のコレヂエ靈父からお手紙が来たり、秋田県馬内天主公教会のブルー靈父からも巡講の御依頼があつたので、東京を五月二十日に出発したのであつた。尚出発間際になつてから、盛岡のドシエ靈父からも、コレヂエ靈父からの御紹介で同市に於ける講演会へ出講のことを申越されたので、順路として先づ盛岡市に行った。

露風は大正十五年五月二十日に東京上野駅を発ち、翌日盛岡着。天主公教会に宿泊して同地に滞在中、ミッションスクールの東北高等女学校講堂で一般市民に対して、また、県立盛岡中学校と県立岩手女子師範学校の各講堂で生徒を対象に、「宗教と文学について」

の題で講演した。次いで二十五日に青森県三本木町に行き、三浦万之助方に宿泊して、同地に滞在中、三本木小学校講堂で一般市民に対して、「宗教生活と文学について」の題で講演し、また、三本木産馬事務所講堂では「神と文学について」の題で講演した。五月三十一日の朝、三浦家の人びとに別れを告げ、三本木町を發つて十和田湖を渡り、秋田県鹿角郡大湯村に行った。

「天父と閑古鳥」の末尾に、「一九二六年五月三十日 青森県三本木にて 三木操」と記されている。この長詩篇は、東北地方巡講の途次、三本木町の三浦万之助方に滞在中の大正十五年五月三十日に完成したのである。

三浦家は○（マルイチ）という屋号で銘酒おいらせ奥良瀬の醸造をしていた地方の名望家で、初代三浦万之助は三本木に初めて天主公教会（カトリック教会）を建てた人であつた。露風が滞在していた時は、二代目三浦万之助（幼名由竹）の時代であつたが、三浦家は一家親族を挙げて熱心なカトリックの信者であつた。

露風は滞在中、家族の人たちから手厚いもてなしを受けた。三浦家に到着した時に、万之助は新しい別館に露風を案内し、洋服ばかり着ては窮屈でしょうと、絹の着物と羽織と袴とを用意した。朝夕の食事の給仕には、函館の高等女学校を卒業した、しとやかな長女ゆきが當つた。東京の暁星中学校を卒業した文学青年の次男常雄は、フランス詩の翻訳を露風に見てもらったりして、露風とよく

散歩をした。万之助と日本大学卒業の長男純男（のち九州帝大卒業）は、美しい十和田湖に露風を案内したこともあった。その時の思い出を純男（雅号、建堂）は次のように述べている。

……この写真にはありませんが、最も注目すべき人物の名を忘れることはできません。それは日本最大の象徴詩人、三木露風先生です。三木木教会と三木露風、ちよっと考えられないことですが、とても深い関係があるのです。露風先生は当時、トラピスト修道院の教授をなさっていました。ある者の陰謀によってトラピストを追放されました。そのとき、先生は父を訪ねて三本木へ来られました。私共親子は先生を慰めるため十和田湖へ案内したことがあります。小船に乗って湖上を周遊していましたが、たしか中山半島のあたりで大波がよせて来て舟がかなりゆれました。そのとき露風先生は「純男さん、こわいよ」といって私の胸にだきついたことがありました。そのとき私はなんて子供らしい方だと思いました。彼は大詩人たることを忘れてただの人間にかえたのでしょう。

その当時のことを詳しく書いたのは、先生の「東北巡講記」です。……「三本木教会と三木露風」との関係は決して浅いものではありません。私は九州帝大卒業後、日本政府から派遣され、カトリック系の天津大学教授として約七年間在任しました。が、帰国後一番先に訪れたのが、三木露風先生夫妻でした。

（三浦建堂「三本木教会と私」「十和田湖カトリック教会一〇〇周年記念誌」）

右の文中に、「露風先生は当時、トラピスト修道院の教授をなさっていました。ある者の陰謀によってトラピストを追放されました」とあるが、これに関連することとして、筆者が『三木露風全集』編集中の昭和四十八年十月二日、三鷹市牟礼のご自宅で三木なか未亡人から聞いたことを、次に記す。

青森で外人の神父に洗礼を受けた和田某（函館の病院で入院手術を受ける時、金銭的に露風夫妻から援助を受けた人）が、神父のいるトラピスト修道院に来て、前年（注、大正十二年）より病床にあった露風がかつて執筆した宗教的論文を、外人である神父に見せて、露風は仏教の教えのことばかり書いていると譏言した。日本語のよくわからない神父はそれを本当と考えたらしい。露風と親しい、日本語のよくわかる神父（外人）は、そうではない、それは誤解だと言って露風を弁護したが、院長は和田某の意見をとり入れた。露風も、もう一度東京に出たいと思っていた時でもあったので、この機会にトラピストを出ることになり、親しかった神父も同時にトラピストを去った。和田は二ヶ月ほど露風の後任を勤めていたが、やがてトラピストより去った。

山野神父（注、山野末市、露風の教え子）に、「和田さんは

最近どうしていられますか」と聞くと、「あんな者、つまらない」と言つて問題にもされなかった。

右の和田某とは和田武夫（号、潮風）であり、親しかった神父とはコルジェ神父である。（森田実歳氏「露風とトラピスト——下山前とその後——」（平成？・11、清泉女子大学人文科学研究所紀要12）

トラピスト修道院以来親交があり、露風の良き理解者であつたコルジェ神父は、大正十五年から三本木教会の主任神父となつていたので露風はしばしば教会に行き、コルジェ神父もまた三浦家に露風を訪ね、神父と露風と三浦万之助は心ゆくまで信仰を語り合つた。

露風はコルジェ神父と三本木原を散策した時のことを、「東北巡講記（二）昭和3・8・1」で次のように述べている。

コルジェ神父と私は、三本木平原を散歩した。川に沿つて並木の立つてゐる路を行く。静かであまり人に会はない。遠くの森を目指して行き橋を渡つてから暫くすると、曲り角に棘の有る樹が立つてゐる。コルジェ神父はそれを指して「これはユデアの木です」と言はれた。私はいかにも棘のあるのがユデアの木らしいと思つて、珍らしくも亦感慨深くそこに佇んで眺めてゐた。

基督が、荊棘の冠を覆せられ給ふたその荊棘のやうな棘が此の木にある。此の木はいばらではなく背の高い樹木である。私は今迄一度も見たとのことのない樹であつた。奇異な心地がした。

更に進んで行くと、大きな樹木の聳立してゐる森に入つた。そこに黒い大きな岩があつた。之れにもベトロ（磐）と云ふ語を聯想せしめる聖教的な感があつた。

コルジェ神父が「ユデアの木」と言つたのは、莖や枝に多数のとげのある、マメ科の落葉高木の「さいから（阜茨）」のことである。また、露風が「汝は磐石^{ペトロ}」のキリストのことはを連想した、森の中にある巨大な岩石は、十和田市相坂白上公園の「大石^{オオイシ}」のことである。（苗村樹氏のご教示による）

三浦家に滞在中、近くの森で閑古鳥がよく鳴いた。閑古鳥は、閑谷巖に学んでいた少年のころより、露風のもっとも愛した鳥である。北海道トラピスト修道院でも、初夏のころには盛んに鳴いて露風夫妻を楽しませてくれたが、今また、この三本木原でもよく鳴いてゐる。カトリックの熱い信仰に生きる露風が、三浦家の厚遇に感謝し、コルジェ神父や三浦万之助と心ゆくまでその信仰を語り合い、愛する閑古鳥の声音に耳を傾けては、自分の全生涯が、また愛妻モニカと結ばれたのも、すべて天父の恩寵によるものであるという幸せを、しみじみ感じ、その喜びを朗々と歌いあげて、愛妻モニカに贈つた詩が、七五調四行六十三節より成る長篇「天父と閑古鳥」である。「妻に」も同じころの作と思われる。露風は「東北巡講記（二）」で次のように述べている。

私は三浦氏の宅に居て静かに詩作する暇を持つた。私は忙し

い時には汽車の中にて原稿を書く。併し三浦氏の処では格別忙しいためではなく、感興のために詩文の筆を執つたのであった。

長詩篇「天父と閑古鳥」は、三浦万之助方に滞在中に作られ、完成したのが秋田地方巡講の途にのぼる前日の、大正十五年五月三十日であった。本稿末（八頁以下）面詩篇を掲げる。

三

露風は五月三十一日朝、三浦家を辞去して十和田湖を渡り、見送りに来たコルジェ神父と三浦万之助に別れて秋田巡講の途についた。

六月一日、秋田県鹿角郡大湯村の尋常高等小学校で講演、三日には午前、毛馬内町尋常高等小学校で講演、午後は小坂町の実科高等女学校講堂で講演、聴衆数百名、四日には尾去沢鉾山事務所講堂で従業員及びその家族三百名に宗教講話、五日夜秋田市栢山の聖霊学院女学校講堂で講演、六日には聖心愛子会の修道院を訪問し、愛子会経営幼稚園の会場で修道女等五十名に神の創造について講演、七日夜、秋田県立図書館講堂で一般市民に講演、八日午後、山形高等学校講堂で学生・軍人・一般市民に講演、夜十一時山形駅発の列車で帰途につき、翌九日八時赤羽駅に着き、愛妻モニカの出迎えを受けて、北豊島郡戸塚町上戸塚三七五番地の自宅に帰った。

このたびの東北巡講の旅は、五月二十日に東京を発って六月九日

に帰京するという、実に二十日間におよぶ長途の旅であった。

なお「天父と閑古鳥」「妻に」と共に、露風旧居から発見されたものに、露風が愛妻モニカに贈った署名付きの、次の九冊の著書がある。署名した年月順に、著書とその署名文を掲げる。

『修道院雑筆』（大正14・8・12新潮社）

「二人の作つた此著を喜をもつて我妻のモニカに贈る 一九二

五年八月十二日 羅風三木ポーロ」

『修道院生活』（大正15・1・14新潮社）

「我最愛の三木モニカに贈る 一九二六年一月十五日 三木ポー

ロ」

『修道院詩集信仰の曙』（大正11・6・25新潮社）

「すず蘭も黄菊も紅き姫百合も、なれに似たりと思ふ此夏 愛

妻三木モニカ様におくる 一九二六年六月 羅風三木ポーロ」

『トラピスト歌集』（大正15・6・15アルス）

「愛する我妻の三木モニカに贈る 汝と共に在りて作りし此歌

集を心から贈る 一九二六年六月」

『神への道』（大正15・7・20イデア書院）

「愛する我妻の三木モニカに贈る 一九二六年七月二十四日

ポーロ三木操」

『童謡集お日さま』（大正15・10・10アルス）

「我愛する妻のモニカに贈る 一九二六年十月十六日 ポーロ

露風

『三木露風詩集第一卷』（大正15・11・16第一書房）

「我愛妻の三木道子に贈る 大正十五年十一月二十三日 露風」

『詩歌の道』（大正14・7・15アルス）

「我が愛する妻の三木モニカに贈る 昭和二年十二月 三木ポーロ」

『童謡集真珠島』（大正10・12・18アルス）

「我が愛する妻の三木モニカに贈る 昭和二年二月十日 三木ポーロ」

——奈良教育大学元教授——

（付記）

本稿を草するに当り、霞城館より貴重な資料の提供と、館長苗村樹氏よりご教示をいただいたことを記して、心から感謝の意を表します。

（平成五年一月六日）

天父と閑古鳥

我愛する三木羅風の妻

のモニカに贈る

一

雨降る空のかなたなる、
林の上になくとりよ。

そは我が愛する閑古鳥。

皐月の末の或ひと曰。

二

そば降る雨の音のして、
庭の若葉の色を増す。

躑躅の花のくれなるに、

あるひは白に咲き揃ふ。

三

又も聞ゆる閑古鳥。

聞くとおもへば止み絶えて、

しづけさ勝る青葉陰、

いと懐しき庭の昼。

四

神の恵の其声よ。

いつしか雨は霽れあがり、
おもひで深き野をおもふ。

聴けば声佳き閑古鳥。

五

此処は陸奥晩春の、

若葉繁れる野の町よ。

天父の聖旨に副ひて来て、

吾はめぐ美の香に浴す。

六

或時さまよふ野や林、

天に在す大神の、

いとくふかき愛をもて、

聴きし聲好き閑古どり。

七

皐月の丘の片辺り。

白き花咲く水のべよ。

友としふたり語らひて、

遠に鳴く鳥聞きにけり。

八

見れば青くさ茂りたる、

野をば流るゝ真清水の、

うるはし行きて音立つる、
いとも麗はし五月の野。

九

嗚呼閑古鳥 閑古どり。

この時鳴ける閑古鳥。

わが故郷の学び舎の、

寮舎の昔、憶ひ出づ。

一〇

そこは翠の山に、

囲まれ、水の、いと清く、

朝暾の光希望あり、

夕うるはし日の餘栄。

一一

我いと若き齡にて、

御神の御恩寵享けし時、

愛と希望に燃えしとき、

天の寵児と称ばれたり。

一二

天にまします我神は、

吾は知らねど、今想ふ――

其時毎日毎に、

1111

春を愛しき
夏秋も。なつあき

一四

桜や、すみれの花めでぬ。

一五

妻よ吾妻。吾れきゝぬ——。

一六

天にて地にて愛されき。

一七

善き愛の家まぼろしを――

一七二八

されど、その我れ、汝を知らず。

△註（昔の我れ）

一八二九

白き花なる、かんばしき――。

一九二〇

北の陸奥、盛岡や、

此處の翠緑の三本木

 $\langle 111 \rangle$
O
 $(\overline{1}\overline{1}0)$

かくてぞ、詩の寵、今ぞ得し

iii

春の、御蒼穹と野の緑。

三三三

あるひは花もて飾られぬ

三三
四四

閑古鳥啼く、遠き森。

(二四) 〈二五〉

西の森にてなくを聞き、
やがて南に啼くを聴く。
うれしき声の閑古鳥。
時には、ほのかの其の声よ。

(二五) 〈二六〉

我その声をきくときは、
心に喜悅湧き来り、
神の善恵思ふなり、
また思ふなり過ぎし日を。

(二六) 〈二七〉

あゝ閑古鳥、汝が声は、
我に似たりと思ふなり。
いと懐しき閑古鳥、
野を飛びて行く閑古鳥。

(二七) 〈二八〉

愛する妻よ、又、語る、
彼の修道の院の場、
尊き神を拜する処、
かしこのめぐりの山や野や。

(二八) 〈二九〉

かしこに啼きぬ閑古鳥、
妻よ 汝も思ひ出で、
その声偲べ、かくてまた、
思へよ、彼の日の修道院。

三〇

その時は我はしばしぞ、
閑古鳥啼く声を聴き、
いと静かにて安らけき、
歌の心地を覚えける。

三一

朝に夕に啼きければ、
汝も親しく愛したり、
妻よ、われ等は語りけり、
彼の閑古鳥、その事を――。

(三一) 〈三二〉

或日に、妻よ、汝は見え、
我等の楽しき愛の園、
そこの窓辺に汝は見え、
彼の鳥のかけ、其の振りを――。

(三二) 〈三三〉

愛する妻よ、もろともに、
われら、旅路に出でし時、
旅にて聴きぬ閑古鳥、
夕映の佳き山裾に――。

(三三) 〈三四〉

或は聞きぬ旅の先、
港の町の家の窓、
汝と我とは、そこに居て、
青葉に啼ける閑古鳥。

(三四) 〈三五〉

都にありて、或時に、
時計の仕懸に、閑古鳥、
啼く音のありしを二人して、
我等は聴けり我妻よ。

(三五) 〈三六〉

こゝは陸奥、吾獨り、
神の恵の中に有り、
日々に、我が妻、汝が爲に、
我は祈れり、恵あれ。

三五〇 三三七

汝^{なほ}知る神の司祭なる

神父と共にわれ、或日、

遠く歩みて森に往き、

御神^{みかみ}の御業^{みわざ}、其処に見ぬ。

三七〇 三三八

長くつらなる青き樹の、

木陰^{こかげ}の路を我等行き、

森に入る路、とある角、

神の、はからひ給ひたる、

三八〇 三三九

一つの棘^{いばら}ある木をば見つ、

神父は、とどまり、そを言ひぬ、

「こを見よ、猶太^{ユダヤ}の樹とは云ふ

棘^{いばら}あり、其れ故、斯^かくのごと」——

三九〇 四〇〇

神父は、又も、言ひ次ぎて、

「このとげ、痛しイエズスの、

御冠^{みかむり}、之れぞ。長さ、ほぼ、

一二寸」とて指^さし示す。

四〇〇 四〇一

其時、我は、思ひたり、

「天父の、この木を此^こ処にしも、

路の曲れる角にしぞ、

生^はへしめ給ひたる、」と木を。

四一〇 四二〇

神父に我は斯^かく言ひぬ、

「天父、この樹を神父へと、

見せしめ給ふ聖旨^{みひめ}にて

路の角^{かど}には在るならん」。

四二〇 四三〇

此猶太^{ユダヤ}の樹、阜^{さい}棘^{いばら}と、

我が日本にて言へるなり。

七つの葉合ひ十四葉、

数もまた奇と謂^いひつべし。

四三〇 四四〇

愛する妻よ、かゝる棘^{いばら}、

樹^たの膚^{はだ}に有り、その生ふる、

異様^{いよう}の姿、見る時は、

天父の御わざを思ふなり。

四五〇

我等往きしに、暫^{しば}しして、

一つの森^{もり}に入りにつけり、

我れのその時見たりしは、

大きな一つの磐^{いわ}なり。

四六〇

キリスト言はれし聖言に、

「汝^{なんぢ}は磐^{いわ}石^{いし}」——この岩を、

我が見て、心に思ひしは、

其^{その}礎^{いしづな}の事なりき。

四七〇

天父が、磐^{いわ}を、其の森に

備^{そな}へられたるにてあらむ——

斯^かくとぞ我は、思ひける。

我等は尚も進み往く。

四八〇

愛する妻よ、しばしして、

我は聴きたり、森の中。

彼方^{かなた}に啼きし閑古鳥、

声の悲しく想はれて——。

四九

天父の御愛のいつくしみ、
哀憐み給ふ聖心に、
つかはされたる閑古鳥、
かなしき愛の閑古どり。

五〇

天父の御愛を懐ひつゝ
吾は歌をば作らむと、
案じて歩みたりけれど、
善き歌としては無かりけり。

五一

天の神をぞひたすらに、
われは、誠に思ひける。
まなこ、うるみて、我れ歩み、
若葉影さす路行きつ。

五二

愛する妻よ、我は今、
近き日、あゆみし夜の事を、
汝に語らむ、汝も知れる
コルジエ神父と野へ往きぬ。

五三

五月の夜は香ばしく、
野は一面に煙りたり、
月はあれどもかくれたり、
土の匂も、好かりけり。

五四

我、青春の時にして、
作りし詩にぞ六月の、
夜の野面を歌ひける、
其を、我、其夜懐ひ出づ。

五五

天父は、かゝる夜にも亦、
深き御恵加へられ、
いと興深く覚えつゝ、
心ゆくまで語らひぬ。

五六

その夜は啼かず閑古鳥、
晝に啼きたる其鳥を、
吾は心におもひで、
はるか野には歩みたり。

五七

いとなつかしき夜の事を、
我は忘れずあるならむ、
森影見えず、暗けれど、
五月の夜は柔し。

五八

けふ、この家に詩を書きて、
汝に贈ると筆をとる。
その時又も、大神の
御恵にて鳥の啼く。

五九

いと朗かの閑古鳥、
空に響きて啼きにけり。
其声心に深く染み
日此にも増しいと強し。

六〇

なほ詩をつゞり續けしに、
しばしの後に閑古鳥、
弱き声して啼きにけり、
別を惜む声の如。

六一

今は別れぞ閑古鳥、
斯く我れ、心に想ひつゝ、
夕の机に向ひ居り、
やがてぞ夜になりにける。

六二

愛する妻よ、今は早、
天父の聖旨のまにまにぞ、
秋田の方へ湖越えて、
立つべき時となりにける。

六三

我神、我父、汝が上に、
いと安らかの幸を、
賜らむこと、わがかへる、
其日までもぞ祈るなる。

一九二六年五月三十日

青森県三本木にて

三 木

操

妻 に

天父の愛の中にあり、
われを導き大神は、
自然や、人の中にしも
恵を、さはに給はりぬ。

愛する妻よ、鈴蘭は
汝が知る如く薫はしき、
白き、よき花、なれのごと
清き愛をば、有てるもの。

けふ、われ、ひとりの神父より、
鈴蘭の花贈られぬ。

人に知られず、我が窓の、
かたはらにこそ、おかれたれ。

なんぢのふみを、我れ見たり、
旅にありてぞ懐しき、
愛する妻の事しのび
帰りをいそぐこゝちする。